

## 「母子相互作用の臨床応用に関する研究」の評価

評価委員 白 井 常

大学入試に合格するためにはこのような高校の教育を、その高校に進むためにはこんな中学の教育を、そのためには小学校の教育カリキュラムはこんな風でなければならないと、まるで子どもの発達を逆撫でするような教育が行なわれている日本の現状の中で、小林登先生が指導しておられる「母子相互作用の臨床応用に関する研究班」の第2回班会議では研究の原点を探ろうとして、乳児、新生児、胎児の時期まで掘り下げて、そこから教育の出発点を見出だそうとしている姿勢の読みとられる発表ばかりだった。その探索の中で子どもが最初に触れる母体との正しい関係がどうあるべきかという点が各研究の共通テーマである。しかも非常に学際的な研究班で、医学、教育学、心理学の研究者が相互の枠を越えて、各分野からいっしょに知恵をしばりあおうとしている姿が感じとられた。人間の種に限らず、実験のコントロールのしやすい他の種、たとえばアミーバ、イヌ、サル等に関する研究の結果から貴重な示唆が提供された。

妊娠中の母親のあり方がいかに生れてくる子どもに影響を及ぼすか、その母親を取り巻く環境などの研究も進められ、新生児と初対面する時の母親の態度とその後の母子関係、正常な新生児および乳児の発達パターンおよび未熟児や心身障害児の行動特徴および母子関係のありかた等が研究テーマとして多く取り入れら

れていた。もう少し上の年齢段階では、幼児期や児童期における母子関係も取り扱われていた。また育児観に関する比較文化的研究も含まれていた。

全体的に非常に多彩で、1つ1つが実に有意義な研究であって、2日にわたって拝聴した筆者は本当によい勉強をすることができた。唯一筆者が希望として感じたのは、幼児初期 Toddler hood に関する研究が少なかった点である。米国でもこの時期の研究は1970年代から始まったばかりで、乳児期の研究に比べればまだ日が浅い。日本では開花したばかりである。しかしこの時期は母子関係の発達にとって非常に重要な時期である。子どもの側では自我に初めて目覚め、自己主張をしだす。この時期に母親が相手の子どもを一人の人格として認めるような新しい母子関係に切り換えられるかどうかで、その後の母子関係は大きな影響を受ける。相手の自由を全く認めないような権威主義の母親であってはならないし、子どもの失敗を赦さない過保護な母親であっても困るし、相手の自己主張にただ追随するような放任主義の母親であってもいけない。子どもが自我に目覚めた当初から、社会の単位である個としての自覚を促すような母子関係に新しく結びかえられることが重要である。このような問題を扱う研究がこれからの母子相互作用の研究に数多く取り入れられることを願ってやまない。